

「男子、厨房にて」

—初稿—

2025/11/10

△人物表△

生原 想 (18)

高校三年生

生原京子 (41)

想の母・シングルマザー

森田洸平 (18)

飯田由美

(18)

想のクラスメート

丸バツ高校・三年一組の教室（昼）

チャイムの音。時間は十二時を回ったところ。

生原想（17）、自分の席に座つて辺りを見回す。

机の上には弁当箱。

想、恐る恐る蓋を開けると、あちゃーという顔。

クラスメート・森田洸平（17）、ニヤニヤ笑みを浮かべながら、弁当袋片手に想の前の席に座つて、

「今日も愛妻弁当？」

想、驚いて弁当の蓋で中身を隠す。

「ちげーよ」

「すゞ、ラブって感じじゃん」

と、横から弁当の中を覗き込む。

近くの席のクラスメート・飯田由美（17）、話に入ってきて、

「何？ 生原くんって彼女にお弁当作つても、うつてんの？」

面白がっている様子に想、焦る。

「違うから。彼女いないし」

「え、じゃあ何？」

と、弁当を見ようとすると、想、必死に蓋で隠す。

「なんでも無いって」

蓋の隙間から見えるのは、ご飯に海苔で書かれた大きなハートや、キャラクターのデコレーション。

想の自宅マンション・リビングキッチン（夜）

キッチンで弁当箱を洗っている想、水を止め、弁当箱を水切りかごに立てかける。

オフィスカジュアルな装いの母・生原京子（41）がレジ袋片手にキッチンに駆け込んできて、

「想ちゃんごめん遅くなつた」

想
「あ、うん。お疲れ様」

京子、急いで料理の支度をし始める。

ふと、洗つてある弁当箱を見て、

京子
「お弁当、どうだつた」

想、一瞬あつて、屈託のない笑顔で、

想 京子 「うん、美味しかったよ」「よかったです」

想 京子 「と、安堵の笑顔。」

想 京子 「すぐ作るね」

と、冷蔵庫を開け、手際よく中身を取り出していく。
想、背後から冷蔵庫の中をじっと見て いる。

3. 想の自宅マンション・想の部屋（朝）

アラームの音。目を覚ました想、ピピッと二つの音が鳴ったところで、急いで止める。
眠そうな顔で、軽く深呼吸。

4. 想の自宅マンション・リビングキッチン（朝）

寝巻き姿の京子、焦った様子でキッチンに入るなり、「ごめん寝坊しちゃった」

コンロの上には卵焼き用フライパン。

想、スマホのレンジピット手に卵焼きと格闘している。

想 「あ、おはよう」

京子、想の様子を見て驚く。

京子 「……どうしたの？」

想 「ああ、弁当作ろうと思つて」

想 京子 「と、不器用な手つきで卵焼きを巻く。

京子 「え、寝坊したから？」

想 「それ俺が目覚まし止めといた。サプライズ」

想 京子 「京子、少し考え込んで、

京子 「……今日つてなんかあつたつけ」

想 京子 「ううん」

想 京子 「じゃあなんで」

想 京子 「今日とかじやなくて、これから弁当は俺が作ろうかなと思つて。母さん忙しそうだし」

想 京子 「と、屈託のない笑顔を向ける。

京子、驚く。

想 京子 「え、いってごめんごめん」「いっていって」

と、キッチンに入つてこようとする京子を制する。
無理やり言いくるめようとして、

「来年から就職だし、料理くらいできなきやと思つて」

「何、急に」

「急に、思つたんだよ」

「怪しい」

京子、考え込む。

「え、彼女とか出来た?」

「は?」

「あ、そういうこと? お弁当作つてあげるみたいな」

「え、違うって」

「別にさ、隠さなくていいんだよ。そういう歳だし」

「違うって。俺と母さんのだけだし」

と、並べた二つの弁当箱を見せる。

「……本当?」

「本当だつて。これから朝ちょっとゆつくりして」

「まあ、そう言うなら……」

想、一人げに安堵。

「てか大丈夫? 想ちゃん料理したことないでしょ」

「大丈夫」

と、両手で京子をキッチンから追いやる。

「あ」

と、コンロを指差す。煙が上がつている。

想、慌てて卵焼きを火からおろして、巻く。

京子、その様子を見て、思わず微笑む。

丸バツ高校・三年一組の教室（昼）

想の机の上には弁当箱。

想、蓋を開くと、卵焼きと肉野菜炒めの普通の弁当。

前の席に座つている洸平、拍子抜けした様子で、

「あれ?」

想、蓋を机の上に置いて、得意げな顔。

「……喧嘩中?」

「ちげーよ」

洸平 「は？」

通りがかった由美、足を止め弁当を見て、

「あ、噂の愛妻弁当？」

「ううん。俺が作った」

「マジ？」

由美 「え、自分で作ったの？ すごい！」

想、得意げに卵焼きを一つ食べる。

ややあつて、ん？という顔。

6.

京子の職場・休憩室（昼）

休憩室の食事スペース。

京子、広げた弁当を見て、笑みを浮かべる。

7.

想の自宅マンション・リビングキッチン（朝）

想、キッチンで弁当箱を洗っている。ひとつため息。

京子、レジ袋片手にキッチンにやってくる。

京子 「ごめん遅くなつた。すぐ作るね」

と、料理の準備をし始める。

想、京子に何か言おうとする。

京子、鞄から弁当袋を取り出し、想に渡す。

「ごちそうさまでした」

想 「あ、うん。あのさ……」

と、弁当箱を受け取るも、言葉が出ない。

京子 「美味しかつたよ。ありがとう」

と、屈託のない笑顔。

想、京子の顔を見て、ハツとする。

京子 「どうしたの？」

「……ごめん。マズかったよね」

想 と、頭を下げる。

8.

丸バツ高校・三年一組の教室（昼）

想、もぐもぐと弁当を食べている。

洸平、その様子を見て、

洸平 「あれ、仲直りした？」

想 想 想

「ちげーよ」
「しかも、パワーアップしてね？」

想の弁当には、海苔で書かれた大きなハートや、ハーバーグの上にチーズでLOVEの字。

想 「これは俺が作った」

と、卵焼きを掴んで一口食べる。苦い顔。

想、箸で持った卵焼きを眺めている。

断面はところどころ黒焦げ。

想 「砂糖多くするとすぐ焦げちゃうの」「へえ」

想 「教えてもらひながらやつたけど、難しいんだよこれが」と、卵焼きを巻く振り。

想 「じゃあ共同作業になつたんだ」

想 「そのうち全部一人で作れるようにする」

想 「なんのために?」

もぐもぐしている想、答えに詰まつて、

想 「え?」

由美の声 「お母さんと仲良くていいね」

由美、弁当片手に想の机にやつて来て、

想 「いい、いい?」

想 「え、うん」

想、呆気に取られていると由美、座る。

「生原くんのお弁当、見せてよ」

想 「……うん」

想、まんざらでもなく、由美と洸平に弁当を見せる。
献立や作り方について熱心に説明し始める。

(おわり)